

温井 達也

Nukui Tatsuya

【株式会社プレイスメイキング研究所 代表取締役】

ヒューマンスケールの「まち」を育てる
プレイスメイキング

在宅勤務が普及することで、住まいの周辺で過ごす時間が増え、くらしている地域への関心も高まっている。近隣を散歩して知人と挨拶を交わすなど、地域やコミュニティへの意識も変わりつつある。徒歩圏にコンパクトに「まち」を造る考え方はかつてからあったが、技術革新により、「まち」の回遊性の定義も変わろうとしている。住まいと「まち」を「住みこなす」という視点で、多くの課題に取り組んでこられたプレイスメイキング研究所の温井達也氏に「まち」の回遊性についてたずねた。

心地良い居場所をつくり 続けるプレイスメイキング

ー プレイスメイキングについてご説明ください。

当社は2004年に設立した筑波大学発のベンチャー企業です。社名にも掲げたプレイスメイキングとは「人と人を結びつけ、物事の仕組みを考え、“ものがたり”をつくるお手伝い」をすること。私たちは、「まち」を道路や建物など(ハード)の集まりだけでなく、人と人、人とモノとの関係性(ソフト)で捉え、「まち」自体が育っていくサポートをしたいと考えてきました。プレイスメイキングは直訳すると「居場所づくり」です。「Placemaking」は進行形で、その居場所をつくり続け、持続することに意味があります。「まちづくり」といえばそれが完成形のように捉えられますが、私たちは「まち」をつくり続けるという意味を込めてプレイスメイキングという言葉を用いています。言い換えれば、重要な要素としての「人」を中心に「まち」を考えることです。プレイスメイキングという言葉にはサステナブルやヒューマンスケールなど、いろんなエッセンスが入っています。ヒューマンスケールは、人というモジュールを基にした概念ですが、まず、人の空間性を大切にるところから始まります。また、高齢者や子どもたちなど、それぞれの年代に寄り添っていく必要もあります。

CONTENTS

特集：回遊性のプレイスメイキング

SPECIAL INTERVIEW
温井 達也 氏 1

SPECIAL EDITION
東郷セントラル 5
三井ショッピングパーク ららぽーと愛知東郷 9
サクラマチ クマモト 11
陸前高田市庁舎 15
南三陸町 中橋 17

RECENT PROJECTS
あったかホームいぶきⅠ 19

くらしは文化
高橋家住宅 21

*本誌では略称を用いています。また、一部敬称は略させていただきます。
表紙写真：南三陸町 中橋

ヒューマンスケールの ニューアーバニズム

— ヒューマンスケールの「まち」とはどのようなものですか。

ヒューマンスケールを都市設計に持ち込んだ考え方が、1980年代後半から90年代に北米を中心に広がったニューアーバニズムです。従来の「まちづくり」の手法に対する批判も込めた、人を中心に据えた都市計画の運動で、ヨーロッパではコンパクトシティ、イギリスではアーバンビレッジが同様の概念です。これもプレイスメイキングの考え方とつながって行きます。

ニューアーバニズムが登場した背景には、米国におけるクルマ中心の郊外住宅開発があります。郊外の無計画で無秩序な開発が近隣住区のコミュニティを崩壊させていくことへの警鐘として、この概念が提唱されました。ニューアーバニズムは伝統回帰的な都市計画といわれ、鉄道やバスなどの公共交通を基本とした、人に寄り添った「まちづくり」です。歩いて楽しい約400m圏内に、歩いて疲れたら休める休憩場所を各所に設け、見晴らしの良い高台には木陰を設けるなど、ランドスケープにも配慮されていました。

また、回遊性は都市の機能だけでなく、そこに住む人の健康にも関係しています。回遊性のある歩きたくなる「まち」は、心と身体の健康・ウェルネスと密接につながっているのです。



温井 達也氏

株式会社プレイスメイキング研究所 代表取締役
1973年兵庫県生まれ
筑波大学芸術学 修士課程 環境デザイン修了(デザイン学修士)
筑波大学人間総合科学研究科 博士 建築デザイン
日本型HOA 推進協議会事務局長
戸建住宅地における住民主体の維持管理について、研究と実務の両面から取り組んでいる。

「まち」を育てる 住民主体の組織が必要

— どのようにして「まち」を育てるのでしょうか。

私の主な仕事は計画的な「戸建住宅地」の管理に関わるもので、住宅地内の共有地管理やメンテナンス手法などの提案をしています。そこでは、所有者に住宅所有者組合を立ち上げてもらっています。これは米国のHOA(Home Owners Association)という仕組みを採用したもので、集合住宅における管理組合のような、戸建住宅地を管理するための組織です。「まち育て」では、所有者と居住者の権利関係での区分が必要になります。建物所有者により、住宅所有者組合を設立します。組合は緑地帯、クラブハウスやゴミBOXを所有し、管理組合費を集め、良好な状態を保つ資産管理を行います。一方、居住者の組織として、自治会(町会、町内会、区会)などがあり、自治活動を協力して行います。行政とのパイプ役や、情報伝達など、多岐に渡る役目を担っています。例えば、ゴミBOXが故障したら管理組合が修理する。利用する自治会は故障しないように清掃するなど、両組織で維持管理することが理想的です。

東郷セントラルでは 「まち育て会社」を設立

— 東郷セントラルにも関与されたそうですね。

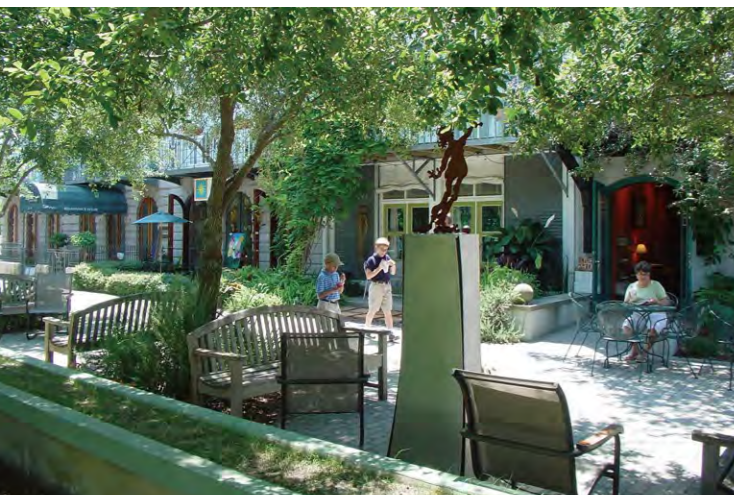
東郷町と関わることになったのは、東郷中央土地区画整理組合から内閣府が掲げたスーパーシティ構想に対応できないかと相談を受けたことがきっかけです。次世代の「まちづくり」を考える際に、道路交通法や区分所有法など、省庁ごとのさまざまな法律が大きな障壁となっています。スーパーシティ構想はこれらを横断的に解決していくものなので、これをテーマに新しいモデルをつくりたいということでした。この土地区画整理事業ではシンボルとなる70~80戸の次世代型の環境街区が想定されており、有限会社アーバンセクションの二瓶 正史氏^{※1}がランドスケープを設計されていました^{※2}。ここに私たちはプレイスメイキングを行う管理付きの住宅地やマイクロモビリティを提案しました。依頼元の区画整理組合は、法律上

「まちづくり」から 「まち育て」へ

— 日本の「まち」づくりについてお聞かせください。

「まち」という言葉には「町」や「街」という漢字が当てられ、最近では平仮名が用いられるようになりました。「まちづくり」という言葉が出てきたのも、ここ数十年のことでしょう。平仮名の「まちづくり」には、これから述べる「まち育て」のエッセンスが入っていると思います。最初に考えるべき点は、誰の「まち」かということです。かつて、専門家が「町・街」を造るという考えが強く、平仮名になっても行政やプロが道路や「まち」を造ると思っている人が大半です。それに対して「まち育て」というのは、もう一歩踏み込んだ自分ごとのことです。子育ては一人ではムリで、自分や妻と両親、親戚の叔父さん叔母さん、ひょっとしたら先に生まれた長男や長女も一緒に協力しなくては簡単にはできません。「まち」を育てるのも同じで、それを担う「私」たちが力を合わせた時に、皆が自分ごとにした「まち育て」が市民権を得て本物になるのです。

住宅地には低層の戸建住宅や中層・高層の集合住宅がありますが、住宅だけだと同じ用途ばかりになってしまいます。ここに商業を組み込むということは、インフラの距離を短くして効率良く運用するコンパクトシティの視点からも良いでしょう。下町だと歩いていけば駄菓子屋さんやパン屋さんなどがあって買い物をする楽しみもあります。そういう意味で、徒歩圏内に商業施設があるのは「まち育て」に関して重要だと思います。



フロリダ州:シーサイドの風景(ニューアーバニズムの一つ、自然な見守り)
1階は店舗やオフィス、2階は住居<2003年7月撮影> ©プレイスメイキング研究所

私自身も大学院生だった約20年前に、ニューアーバニズムの「まちづくり」を見て、その美しさに度肝を抜かれました。メキシコ湾に面したフロリダ州シーサイドのプロジェクトを視察に行った時は、本当に美しく、「こんな所に住んでみたい」という考えに発展していきました。あの「まち」の美しさは、つくって終わりではなく、どのように維持管理するかにまで配慮した都市設計が背景にあります。たとえば巨大なグリーンベルトを設ける場合には、何回で刈れるかを計算し、芝刈り機の幅からグリーンベルトの幅を割り出して決めています。維持管理も見据えた上で都市が設計されているのです。しかし、あまりにも計算された美しい「まち」を、映画のセットのように、よそよそしく感じたことも事実です。



フロリダ州:シーサイドの風景(住宅地内の移動に便利な小型モビリティ)
<2003年7月撮影> ©プレイスメイキング研究所

近年の都市計画は、クルマからどのように人を守るか(歩車分離)や生活圏へのクルマの進入を防ぐ「まち」の設計が中心でした。しかし、自動運転車やマイクロモビリティなど、最先端技術が導入されると人とモビリティとの関係も変わってきます。私は「第2次モーターゼーション」と呼んでいますが、日本の技術が少子高齢化の課題を解決すると期待しています。日本人は、それぞれの地域特性を生かすことが得意です。気候風土に合わせてくらせるように対応してきた国民なので、少子高齢化にも対応できる最先端の「まちづくり」ができるかもしれません。ひょっとしたら憧れていたニューアーバニズムに追いつくどころか、もっと先に行くかもしれないのです。

— ありがとうございました。

※1: 建築設計レポートVol.27インタビューにご登場いただきました ※2:P8で詳しくご紹介しています